

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 295



1996 JUNE



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

平成8年度通常会員総会のお知らせ!!

日本ヒマラヤ協会平成8年度通常会員総会を下記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意思決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。(委任状は、別途送付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。) 5月15日までに必着するようお願いいたします。

記

1. 日時 平成8年5月25日(土)午後1時～2時
2. 場所 東京都豊島区東池袋4-7-7
かんぼヘルスプラザ東京
☎ 03-5952-6881
JR池袋駅東口から徒歩8分

地下鉄有楽線東池袋から徒歩2分

3. 議事

- (1) 議案第1号 平成7年度事業報告について
- (2) 議案第2号 平成7年度収支決算について
- (3) 議案第3号 平成8年度事業計画について
- (4) 議案第4号 平成8年度収支予算について
- (5) 議案第5号 役員の変更について
- (6) 議案第6号 会員の除名について

4. その他

表紙写真

ミニヤ・コンカ東面ヤンズーコー氷河は、その源を北壁や北西稜に連なる山々、右岸側を形成しているソニヤッツェンなどから発している。

氷河の舌端下に左岸から大きな支流が合流する。三角錐の美しい峰エドガーは、ベース・キャンプから望むことはできないが、霧の晴れ間に時折り姿を見せるのが、その前山の無名峰群である。左が6134m右が約6000mである。

(記：山森欣一)

ヒマラヤ No.295

1. ミハヤエル・ダッハー逝く

3. 中高年? ヒマラヤ流れ旅(5)

(カンジロバ) カグマラ峠を越えて

阿部 淳

7. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・インフォメーション・Books・トピックス〉

10. 中国高峰登山小史(12)

16. 西藏登山の和文参考資料一覧

24. 寸感・事務局日誌

ミヒャエル・ダッハー逝く

MICHAEL DACHER
(1933-1994)

1994年12月2日～3日自宅で就寝中に、朝目覚める事無く亡くなっていたのを発見された。享年61歳。ミヒャエル・ダッハーを知る多くの人々は、あまりに早過ぎる彼の死にショックを受けた。

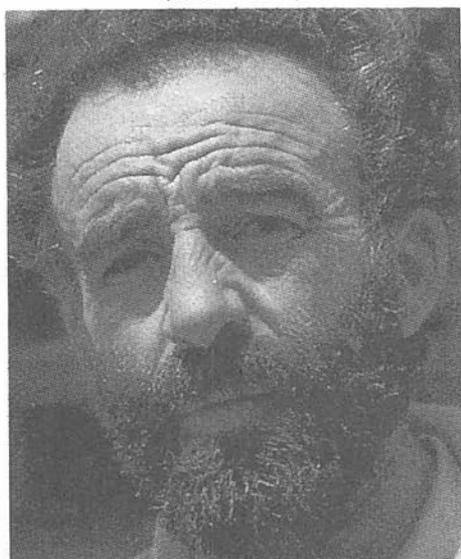
1933年8月21日オーバーバイエルンに生まれ電気技師となった彼は、故郷である旧西ドイツ、バイエルン州の前衛山脈アマガウアー・アルペンで登山を始め、特にガルゲルシュタインを活動の場としていた。1950年代にはロッククライマーとしての才能を発揮し、“荒々しい皇帝”の異名を持つヴィルダー・カイザー山群やヴェッターシュタイン山群の最難ルートに全てをやりつくし、トリ・シモ北壁やマルモラーダ南壁等ドロミテ山群のあらかたのルートにも足跡を残している。

アルプス西部におけるミヒャエル・ダッハーの登山記録は極めて感銘深く、その記録の内の幾つかはシンプルな登山スタイルが斬新で印象的であった。1959年ノルウェイのトロール壁と、同シーズンにドロミテのピッツ・バディレ北東壁の登山に成功したのを皮切りに、1964年グランド・ジョラス北壁ウォーカー側稜、1966年マッターホルン北壁、1969年アイガー北壁等を完登し、1970年にはグリーンランドの“ナンセンのspur”を西側から東側へ42日間で踏破している。

1975年5月9日、カンチェンジェンガ西峰(8,505m)とも称される巨大なヤルン・カンの第二登(編注・京大隊は頂稜の一角に登ったと思われるのでダッハーらが初登頂である)を果たしたミヒャエル・ダッハーの名は、国際的に知られる様になった。その後の彼は次々と8,000m峰に登頂し、その内の数座はドイツ人としては初めての快挙で、彼はドイツに於ける高所登山の先達となった。

主な8,000m峰登山の経歴は、別記の通りである。年齢にもかかわらず、ヤルン・カン以外の登頂は無酸素と言う素晴らしい登山スタイルで成し遂げている。

ラインホルト・メズナーやイエジ・ククティカが8,000m峰14座全座登頂を成し遂げた時点で、ミヒャエル・ダッハーの名前は世界記録第5位に



掲げられていた。1994年この世を去った時点でさえ、その記録は第9位の座を保っていた。

ミヒャエル・ダッハーは、高所登山にだけ情熱を注いでいたわけではなく、アルプスそのものへの想いも持ち続けていた。彼のスキーの腕前は相当なものでスキーのインストラクターでもあったが、1970年には登山ガイドの資格を取得した。ここ10年間はパラパントに熱中していた。彼の山へのあふれんばかりの情熱は止まることを知らず、多くの仲間と行動を共にする事を強く望んでいた。沢山の若い世代の者たちがミヒャエル・ダッハーの教えの下で、クライマーとして、アルパイン・スキーヤーとして、登山ガイドとして、また、パラパントのエキスパートとして育っていった。

死の前日、彼は友人たちとパラパント飛行をしたり、1995年に計画しているアンデス旅行の打合わせをしていた。

頑丈でしっかりとした彼の心臓が遂に彼をして死に至らせたとは、予期せぬ皮肉な痛恨時であった。(H J ニュースレター 訳: 寺沢玲子)
ダッハー、8,000m峰の記録

* 1 座目: ヤルン・カン (8,505m) 南面グレート・シュルプから1975年5月9日初登頂。(41歳) ドイツ・オーストリア隊(ギュンター・シュトルム/ジークフリート・エーベルリ隊長ら11名) 4月6日BC (5,500m) 建設。5月3日C4 (7,8

00m) 建設。9日C4から頂上に続くクーロアルに入り、ダッハー、エーリッヒ・ラックナー、ロルフ・ヴァルターが初登頂に成功。12日にはゲルド・バウアー、ペーター・フォクラー、ヘルムート・ヴァグナー、13日にもゼップ・マイヤー、ギュンター・シュトルム、フリッツ・ツィントルが登頂した。

* 2座目：ローツェ (8,516m) ウェスタン・クームの初登ルートから1977年5月11日無酸素登頂。第4登。(43歳) ドイツ隊 (ゲルハルト・シュマッツ隊長ら13名) C5を7,800mに設営。5月8日ヘルマン・ヴァルト、ヨハン・フォン・ケーネル、シェルパのウルキュンが第2登に成功。9日にはギュンター・シュトルム、ペーター・フォクラー、フリッツ・ツィントル、11日にも無酸素のダッハー、セバスチャンとペーターのヴェルゲッター兄弟、マックス・ルッツが登頂した。しかしルッツは下降中死亡しているのが発見された。

* 3座目：K2 (8,611m) 南東稜から1979年7月12日無酸素登頂。第6登。(45歳) 国際隊 (ラインホルト・メスナー隊長ら6名) 6月20日4,950mにBC建設。7月6日7,350mにC3建設。メスナーとダッハーが11日に7,910mでビバークして翌日登頂した。第二次隊は悪天のため中止。BC建設から22日目の登頂。

* 4座目：シシャパンマM (8,027m) 初登ルートの北東稜から1980年5月7日(無酸素)登頂。第2登。(46歳) ドイツ隊 (マンフレッド・アベライン/ギュンターシュトゥルム隊長ら9名) 4月1日5,000mにBC建設。7,734mにC6建設後、5月7日ダッハー、ヴォルフガング・シャフェルト、ギュンター・シュトゥルム、フリッツ・ツィントルの4名が第2登に成功。12日にもジークフリート・フップファウアーとマンフレッド・シュトゥルムが登頂した。

* 5座目：ガッシャーブルムI (8,068m) 北面一部新ルート (メスナー・ルートの左手) から1982年7月22日(無酸素)初登攀。第7登。(48歳) ドイツ隊 (ギュンター・シュトルム隊長ら6名) 6月18日BC建設。天候悪化で1ヶ月も待たされたが、7月21日C3を建設。22日隊長とダッハー、ジークフリート・フップファウアーが登頂した。

* 6座目：チョー・オユ (8,201m) ネパール許可による南西壁から1983年5月5日(無酸素)アルパイン・スタイルで初登攀。第6登。(49歳) メスナー隊 (ラインホルト・メスナー隊長ら3名) 4月26日ナンパ・ラの下5,000mにBC建設。南西壁に入り一部中国領チベットを通過して、2回のビバークの末、5月5日にメスナー、ダッハー、ハンス・カマランダーの3名が登頂した。

* 7座目：マナスル (8,163m) 北東面通常ルートから1984年5月7日(無酸素)登頂。第22登。(50歳) ドイツ・スイス隊 (ギュンター・シュトルム/ハンス・アイテル隊長ら12名) 3月29日BC建設。4月30日マルセル・リュデイ、エアハルト・ロレタンが登頂。5月7日ダッハー、フリッツ・ツィントル、11日にもノベルト・ヨース、ヴォルフガング・シャフェルト、ルドルフ・シャイダー、隊長、と二人のシェルパ、アン・チャパル、ウォン・キエルも登頂した。

* 8座目：ナンガ・パルバット (8,125m) 西面ドイツ・ルートから1985年7月12日(無酸素)登頂。第21登。(51歳) オーストリア隊 (ピーター・ハーベラー隊長ら5名) 7月11日に7,400mにあったポーランド女性登山隊のC4跡でビバークしたハーベラーとダッハーが12日に登頂した。

* 9座目：ブロード・ピークM (8,047m) 西稜の初登ルートから1986年8月16日(無酸素)登頂。(52歳) ドイツ隊 (ジークフリート・フップファウアー隊長ら4名) 7月28日BC建設。8月14日にオーストリア陸軍隊のC4に宿泊したダッハーは16日登頂した。

* 10座目：ガッシャーブルムII (8,035m) 通常ルートの南西稜から1987年7月10日(無酸素)登頂。(53歳) ドイツ隊 (ハンス・ヘニング・サイム隊長ら7名) 6月28日ジークフリートとガビのフップファウアー夫妻が登頂。10日にダッハーとウルリヒ・シュミットも登頂した。

メスナーは著書「生きた、還った」の中で、ダッハーのことを「とくに強調したいのは、ダッハーの8,000メートル峰での多大な成果により、ドイツ人が、各国のアルピニストにさきがけて、すべての8,000メートル峰へ登ったことである」と、記している。(文責：山森欣一)

(カンジロバ)

カグマラ峠を越えて

阿部 淳

(1) 憧れの山と湖へ

●あれは、カンジェラルワだ

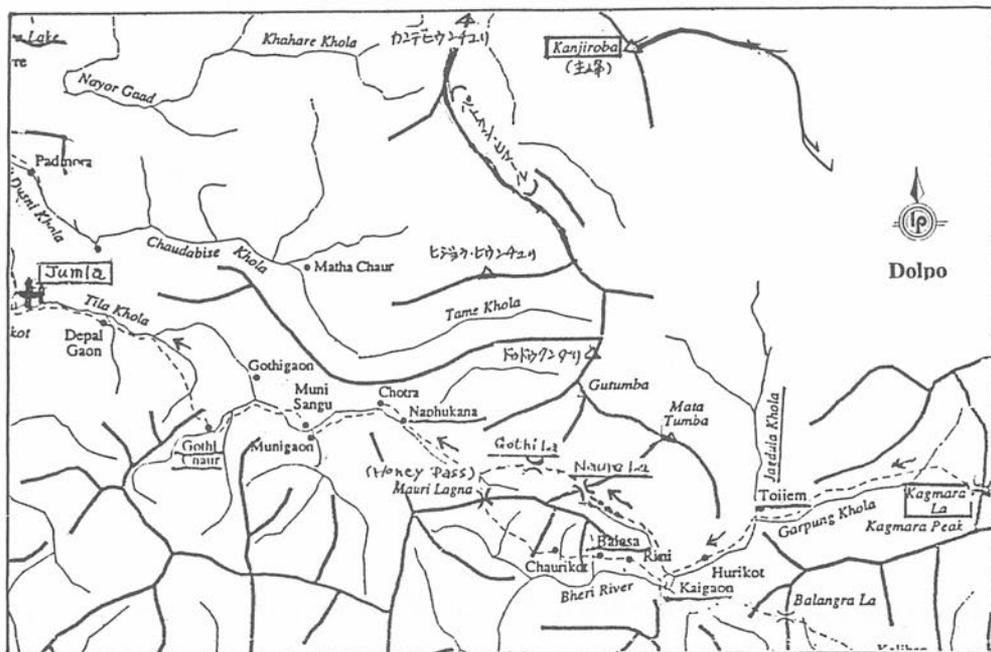
5/6、パラムから500mのジグザグの登り、上部で“ネパール最大の滝(330m)?”が見え、遙か上に僅かながら湖が見える。あそこだ。登りのトップを過ぎて回り込んだ時、雲に包まれて、あ、見えた!あれだ、カンジェラルワだ!もしも世の中に神が存在するなら、それはきっと僕の味方に違いない。厚い雲が流れ始めて山の輪郭が広がり、やがて祈りに応えて、頂きが予想よりもっと高い空に浮き上がった。堂々とした孤高の雄姿、懸垂氷河を張り詰めた険しい山頂部の競り上がり!アレ、違う、頂きはもっと奥にある、待とう!5分もたったろうか、ソラ、雲の間から姿を現したあの白い頂きこそ、本当のピークだ!あの頂きに登ろうと本気で燃えた時があった、22年前だった。それ以来ここへ来るだけの余裕はなかった。カンジェラルワが霞んでくる。やがて“もう見ただろう?”と言わんばかりに、また雲の彼方に消えて

行った。その姿を呆然と見ながら、僕は何かに祈り頭を垂れるしかなかった。

●フォクスンドにて

ラマ教圏のリンモ村を過ぎて少し登ると、突如として目の前に、青々と緑に満ち満ちたフォクスンド湖が現れた。高度3,600m、幅1.5km×5.0km、大きく広い氷河湖だ。西欧人グループが名残惜しそうに去っていった。ダワ君が村から買ってきてくれたヤクの肉とビールを湖畔で満喫した後、テントを張る。そこは最前線でフォクスンド独り占めだ。ここからカンジェラルワの姿は見えないが、湖は山影を紺碧に沈め、七変化の陰影をくゆらせながらも、次第にモヤの中に包まれていく。

夕方、湖沿いに15分、ボン密教寺へ行く。ここからは湖上に聳えるカンジェラルワが見える。やがてダワ君も着き、ゴンパの坊さんが出てきた。坊さんは、「左のピークは“カンチェンロルバ”と言い神様が住んでいる。日本人が東側から氷河



© Stan Armington by Trekking in the Nepal Himalaya

を回って登った」、双耳峰に見える右のピークは「カントパで、こちらの方が高い」と言う。吉沢一郎さんの地図(73)では“カントンパ、6,237m”、カンジェラルワは6,612mである。ゴンパの本堂に入れてもらう。古い仏像と経文が詰まっている。坊さんのダワツェリンさんはこのゴンパで生まれてここで修行を積み、今73歳と言う。

夜、暗いモヤに包まれいく湖面を惜しみながら、グラスを傾け、音楽を聴く。己の何もなしえない嘆きと哀しみは、祈りの果てに眠りを待つしかない。琴とコントラパスの“日本の詩情”が“ふるさと”から“浜千鳥”へ、慟哭の高まりのあと、いつしか無の世界に誘い込む。

(2) カグラマ峠をめざして

●ナマステ、フォクスンド

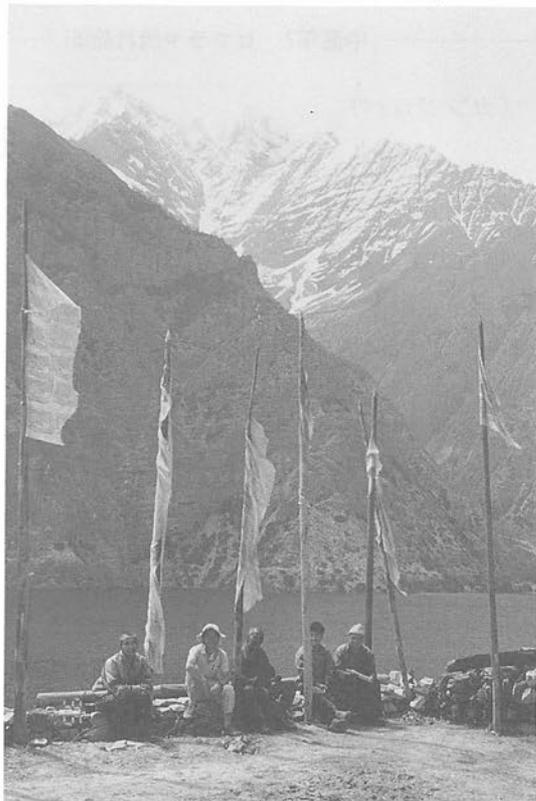
今のところ高血圧も糖尿も悪化の兆候はないし、問題の膝もふくらはぎも可成りの酷使に耐えている。精神的には、“Never give up! 初心を忘れるな!”と己を叱咤し、妥協を許していない。このままカグラマ・ラに立とう。

5/7、早朝もう一度、双耳峰の高さが気になってゴンパへ行く。雲はなく、前日のカンジェラルワのピークはまだ奥に白い頂きが続いており、高さを比較確認できた。若いアメリカ人女性が一人、ガイドを連れて下って行った。ボン密教の研究のためにゴンパに2泊していたと言う。そのタフな実行力に感心する。

ナマステ、フォクスンド! パラムで昼食、午後スムデワの二股からドジャム・コーラ(英書ガイドは“ブンモ・コーラ”が正しいとしている)に入り、2時間半でブンモ村、放牧地にテント。正面のピラミッドを村人は“カンチン”と言う。吉沢さんの地図の“カンツーネ、6,443m”であろう。この山にはこの後、南から西からずーっとお付き合いした。今日は朝から、なぜか疲れた。きっと昨夜の湖畔でのアルコール快飲のせいだろう。

●狭まるドジャム・コーラ

5/8、いつもの7時出発、カンチンを左正面に、カンジェラルワの西面の山裾に沿って歩く。3時間、雪溪が出てから谷は次第に狭くなり、2~300m高捲いて進む。急な斜面の中腹で昼食炊事。その頃から流れる雲が山で乱され、陽が陰っ



て寒く、遂にアラレとなった。時折、雪の斜面にバケツ様の踏跡を見つけるが、急峻な雪渓が続いて45kg背負ったポーターがズブリと埋まる。一步誤れば、下の谷底まで一直線だ。予定はラサ・カルカ上部であったが、等高線や地点をキチンと示した地図はなく、谷は雪に覆われていて位置確認ができない。15時、雪の僅か切れた平坦地にキャンプする。ラサ・カルカの手前上部の4,300mぐらいか。夜、小雪が続く。

5/9、朝、一面の雪で真っ白だが青空だ。この先の雪の状態を調べに2人のダワ君が偵察に出た。3時間で戻り、“少し先に、雪がぬかってポーターに良くない所があるが、あとは3時間位で雪のないテントサイトがある、峠もすぐ見える”と言う。昼過ぎ、また昨日のイヤな雲が流れ出してアラレとなった。昼食が長いので一人先に出る。やはり雪が緩んで時折踏み抜き、腐った雪溪のトラバースは緊張の連続だ。ダワ君が追いついて来たので一行を待ち、隊列を整える。僕とダワ君はキック・ステップとその補強、次はポーター2人、コック・ダワ君はアンカーおよびポーターのサポートとし、慎重に進ませる。3時間で、カグラマ・

ラに見える広い台地に着く。4,500m位か、峠は
そう高は見えないので或いはもっと高いかも？
後方にカンチン、カンジェラルワ、正面にカグマ
ラ・I、トライアングルが見渡せる。明日は峠越
えだ。

●雪のカグマラ峠

5/10、今日は4時半起床、あまり寒く感じな
い。6時出発、広く開けた平坦な雪の谷あい
を2時間半、それから登りとなって30分、“岩場”も
何の問題もなくカグマラは目前だ。峠に初めて人
影が見えてコール、オーストラリア人10人とガイ
ド・ポーターなど総勢30人の大パーティーで、ガイ
ドはチャンとザイルを背負っている。お互いに
激励し合って9時半、広い雪原の峠に立つ。石の
大きな堆積の上に一對のヤクの角が鎮座してい
て、いかにも辺境の峠らしい。5,115mだが高度は別
に感じない。主峰(6,883m)は30km離れていて
意外に遠いが、180度の眺望はさすがに広い。あ
れは大阪市大が西の山越えをして初登した主峰だ、
あれは岡山大が初登し2〜3年前にダグ・スコ
ット隊が新ルートを開登したハンギング・グ
レシャーだ、そうだイギリス女性隊が30年
も前にこの周りの山々を登りまくったのだ…
一つ一つの山を確認して、下る。沢沿いの
1,000mの急下降、ポーターが雪に埋まって
辛そうだ。先ほどのパーティーも2人が座
って俯いていたが、ここの登りでは無理
もない。13時、やっと平坦地(カグマラ・
フェディ? “峠の下”の意)で炊事タイム、
ここでキャンプとする。これでネパール
でのメイン・ターゲットは無事果たした。

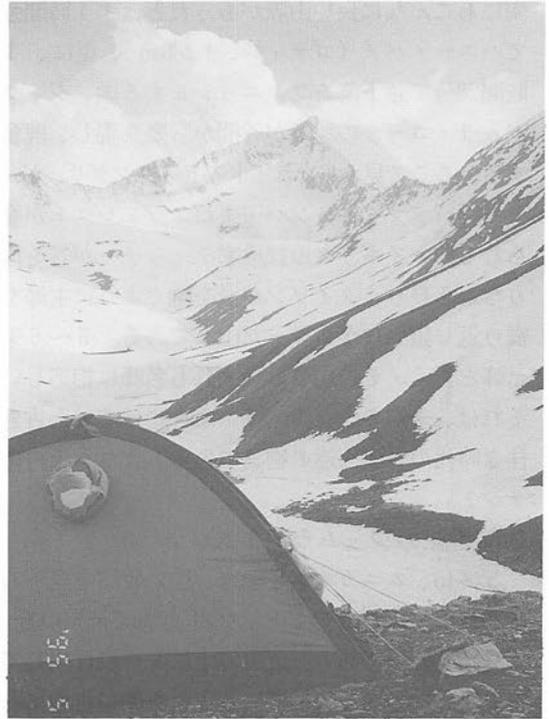
(3) ジュムラへ向けて

●次はハニー・パス(蜜の峠)

5/11、川沿いに下り、丸木橋が流されてい
て渡渉したあと高巻きが続き4時間半、
ジャグドゥラ・コーラ出合いを目指して、
一気に大下降、トイジャムのアーミー・
チェック・ポストでテントを張る。ドイツ
人学生4人が昆虫採集でキャンプしており、
そのガイドは“シェルパ・ジャパン・
トレッキング”所属と言う。夕方から雨。

5/12、のっけからの高巻き1時間で公園宿
舎、下って初めてカルカとバル(牛等を入
れないための石囲い)に出会う。そして大
きい村フリコット、

▼カグマラ峠を見る



20分でカイガオン村(2,750m)。ここには
ホテル&パティが3軒あり、フォクソ
ンド以来のビールやウォッカもラムも
ある。ガルプン・コーラべりの牧草
地にキャンプ。すごい人ばかりだ。

5/13、ここからガルプン・コーラ沿
いにリミ、チャウリコットを辿りマウ
リ・ラグナ(ハニーパス; 3,927m)に
至る常道があるが、もう一つ、高
巻きトレイルが北側にあり、そこ
にもハニーパスがあつて(?)眺め
がベターだと言う。勿論“眺め”
を採ったが、今日は何だか調子
が出ない。1,500mのきつい登り
というだけではなく、何か重い。
昼過ぎにはジャグドゥラの山も
見え、林を抜けると広い高原、
気持ちの良いアルプとなる。見
上げると、尾根のコルが見える。
それからがヨレヨレで、頑張ると
すぐにバクつく。一步一步足を
持ち上げ、そう高くない所で何
で?と考える。あ、そうだ、夕
べのウォッカのビール割りだ。
久しぶりでハメが外れたのだ。
泣きべそもかけず最後の登り
をジグを切つて15時半、何か
ケルンに辿り着いた。ナウレ
峠、4,206m、下の峠よりも
280mも高い。四方は遠く雲
の中だが展望は素晴らしい。

5/14、早朝30分、丘に登る。上空
に雲はあるが180度、茜色のパ
ノラマだ。東はカグマラ、ト
ライアングルか、西の端は遠く
アピ、サイバル、

南にもこんなに良い山脈があったとは！1時間強でハニー・パス（ゴティ峠、4,280m）、更に、1時間20分で急下降をフィニッシュする頃、ジャグドゥラ・コーラの峻峰が谷間から姿を現し、興奮する。ここで見えるとは！ドゥドゥクンダリ、ギョトウンバ、マタトウンバ…まだエヴェレストが登られる前、イギリスの探検家ティッチーが谷を探りながら登り、タイソンが後を継ぐように主峰を繰り返し狙いながら登った山々である。5～6km峰と言え、その山姿はいずれも名峰に相応しい。それは、未知の山々の開拓に命を賭けていた古き佳き時代の登山家達の物語である。カウカナ村にテント。

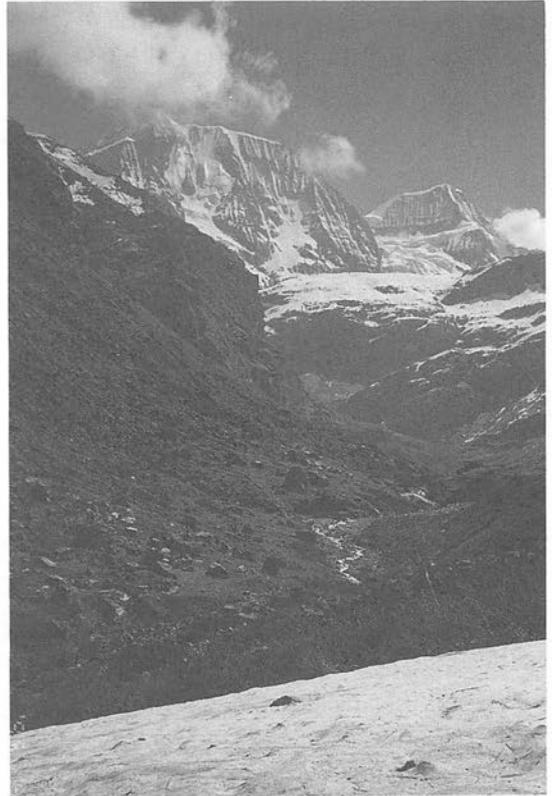
●前世紀のジュムラ

5/15、ムニガオンを過ぎ、広い牧場を見下ろし、やがて草原のティチャウル（2,660m）の丘。国立種畜牧場である。芝生の上に身を投げ出して青い空と白い雲を眺めていると、お伽の世界に吸い込まれそう。アップヒルのトップに出ると西側の展望、そこも壮大なアルプ・ファームだ。15時、ガルジャンコットでテント。この辺りは農家が多いせいかわどく蠅が群がる。テント内外をバルサンとスプレーで退治する。明日はもうジュムラだ。カイガオンから6日見ていたが、4日で仕上がる。

5/16、次第に農家が増え村から町へ変わり、3時間で飛行場へ着く。カンジロバはこれで終わった。辿ったコースは本来登山隊のキャラバン・ルートのせいか、会ったのは外国人4グループだけであった。名残惜しくもある。

この町にはテント適地はなく、ベストというマウンテン・ホテルを宿にしたが、客が泊まった事があるのか疑う。バルサンと水で大掃除。街はホ

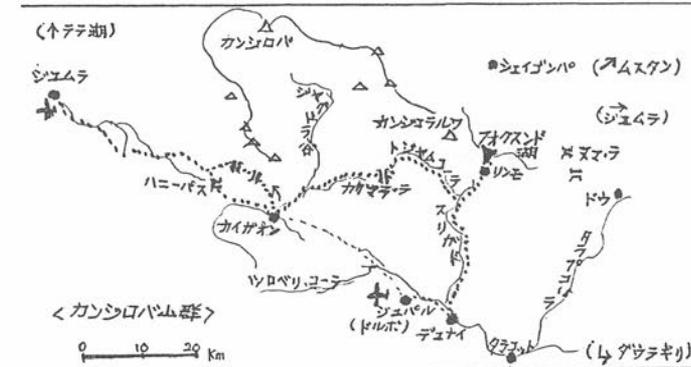
▼ジャグドゥ・コーラの山々



コリ、ゴミ、吹き上げる風、座りこんだり寝たりしている人の群れ。これだけ家並があり集客があるのに貧乏で何も無い。しかもネパールなのに、ここは唯一の禁酒エリアである。ネパール政府も手付かずにしてきた王家一族の支配下にあるからだ。明日のフライトを確保する。

5/17、逃げ出すようにホテルを出て街を抜け空港に来ると、空気がきれいでホッとす。2時間遅れに11時発、ネパールガンジは前と同じパティカ・ホテル、あゝ、ジュムラとは天国と地獄！久しぶりにシャワーの後の冷えたビール、庭の日除けの下でのガーデン・ビア！翌日18日ぶりのカ

トマンズに着き、タメルの西北パナクジョルのH・マナンに移る（B&B、A/C、C・カードで\$25=¥2,100）。少し高いがしっかりと落ち着いたルームと、TVニュースを見れるのが良い。さあ、次はパキスタンだ。



地域ニュース

《ブータン》

ツェチュ祭1996年

ブータン観光局によると、昨年パロのツェチュ祭には651人の観光客が訪れたが、今年は3月30日から4月4日まで催されるツェチュ祭を見学に訪れた観光客は、約566人であった。

ツェチュ祭はブータンに仏教を伝えたグル・パドマサンババに因んだ祭で、“月の十日”の意味。

(KUENSEL 3月23日号)

ブータン・ヒマラヤ協会

ドイツに本部のあるブータン・ヒマラヤクラブがこの度、3月下旬にブータンを訪問した同クラブの事務官ラム・プラタブ・タパ氏の提唱により、ブータン・ヒマラヤ協会と名称を改めた。

ケルンに本部を置く同協会はブータンに関する5～6の研究会や講義、講演会等をオーガナイズしており、毎年ドイツ国内の各分野の人々が100人近く参加している。

タパ氏はクエンセル紙の取材に対して、協会の運動の一環としてドイツを訪れるブータン人のお世話をすると語った。

(KUENSEL 3月30日号)

《インド》

1996年ヒマラヤン・クラブ役員

1996年のヒマラヤン・クラブの役員が下記のように改選された。

会長 J. C. ナナヴァティ
副会長 K. K. グハ
(3名) S. P. マハデヴィア
N. D. ジャヤール
書記 アルン. P. サマント
会計 デヴェッシュ・ムニ
評議員 K. N. ナオロジ
(10名) ヴィジャイ・ヘッジ

R. バタチャルジー
ディレン・パニア
M. H. コントラクター
スディール・サヒ
ハリシュ・カバディア
ジョイディーブ・サーカー
タニ・キラチャンド
M. S. ソイン

インド・ヒマラヤ7,000m台未踏峰一覧

ヒマラヤン・クラブのニュースレター (No.49=1996年度版)によると、1995年末現在インド国内に残されている7,000m台の未踏峰は30座ある。地域別に見てみると、シアチェン15座、シッキム10座、東部カラコルム3座、クマオンとガルワールにそれぞれ1座となっている。

シアチェン

1. サルトロ・カンリ II (7,705)
2. サルトロ山群無名峰 (7,200)
3. サルトロ山群無名峰 (7,100)
4. サルトロ山群無名峰 (7,100)
5. ハーディング (7,024)
6. テラム・カンリ西峰 (7,300)
7. シェルピ・カンリ南峰 (7,370)
8. ゲント東峰 (7,000)
9. シェルピ・カンリ東峰 (7,303)
10. アプサラサス II (7,239)
11. アプサラサス III (7,230)
12. アプサラサス IV (7,221)
13. アプサラサス V (7,187)
14. アプサラサス VI (7,184)
15. アプサラサス東峰 (7,000)

シッキム

16. ゼム・ピーク (7,780)
17. カブル IV (7,395)
18. カブル西峰 (7,279)
19. カブル山群無名峰 (7,245)
20. カブル山群無名峰 (7,129)
21. カブル山群無名峰 (7,149)
22. カブル山群無名峰 (7,278)
23. カブル山群無名峰 (7,080)

24. カブル山群無名峰 (7,060)
 25. パウフンリ南峰 (7,032)
 東部カラコルム
 26. サセール・カンリ II (7,518)
 27. プラトー・ピーク (7,233)
 28. チョン・クムダン II (7,004)
 ガルワール
 29. ムクト・パルバット東峰 (7,130)
 クマオン
 30. ティルスリ西峰 (7,035)

サセル・カンリ I 遭難続報

昨年8月27日、S・Cネギ隊長率いるB・S・F (Border Security Force : 国境警備隊) サセル・カンリ I 峰登山隊がインド・ヒマラヤ登山史上最大の雪崩遭難事故に遭い、13名が死亡した。遭難した隊員の殆どが高所登山の経験豊富なクライマーや、B・S・Fのトレーニングの“ザンスカール843km踏破”やラダックのラマユル・ゴンパからデリーまでの1,175kmリレーをこなした者など、次世代を担う有望な青年であった。

1986年には世界第2の高峰K2で一シーズン中に13名のクライマーが遭難すると云う大惨事が起こった事が我々の記憶に新しいが、今回のこの大量遭難事故は、一雪崩事故で一登山隊中13名もの命が一度に奪われたと云う点で、インド登山界に大きな衝撃を与えた。

以下に遭難者名を列記し、彼らの冥福を祈る。

1. S. D. トーマス (33 : 登攀リーダー)
2. K. L. ネギ (37)
3. T. R. アングドー (47)
4. J. ハーン (32)
5. J. ラサ (38)
6. N. S. クマール (28)
7. M. シン (20)
8. N. シン (28)
9. R. シン (26)
10. K. シン (29)
11. P. リグジン (21)
12. V. クマール (26)

カシミール過激派、警官と衝突

インド北部ジャム・カシミール州スリナガル北部のハズラントバルで3月30日、分離独立運動を続けているイスラム過激派が治安部隊と「ここ数

年で最も激しい銃撃戦」を展開、有力ゲリラ組織「ジャム・カシミール解放戦線シディキ派」のシャビール・シディキ代表を含むゲリラ兵少なくとも21人が死亡、警官6人が負傷した。シディキ派は、インド政府に最も敵対的な組織の一つ。政府が総選挙をカシミールでも5月に実施すると発表した3月下旬から、武力抗争を一段と強化させており、総選挙をめぐる対立がエスカレートした可能性が強い。(3月31日付朝日新聞)

インフォメーション

藤江幾太郎・山の画展・第41回

下記のとおり開催されます
記

■7月1日(月)～7日(日)

11:00～18:30 (最終日17:00)

■朝日アートギャラリー

JR有楽町、地下鉄丸の内線銀座C4/5

■ネパール及び国内の山と旅で得た、油絵作品20点余を発表します。

Books

横断山脈 ミニヤ・コンカ

94年秋ミニヤ・コンカ東面ヤンズーコー氷河から登頂を目指したが、4名が行方不明となったH A J登山隊の登山と遭難の報告書。

内容は登山と事故報告、追悼と遺稿、資料の3部からなっている。

B5版116頁、カラー8頁、モノクロ16頁
価格3000円、送料310円 (残部30部のみ)

申し込み : 〒170 東京都豊島区東池袋 4-2-7

萬栄ビル501号 日本ヒマラヤ協会

郵便振替 00100-6-48954

トピックス

第15回新田次郎文学賞
谷甲州氏に

第15回新田次郎文学賞は、4月17日の選考委員

会で、谷甲州氏の「白き嶺の男」など3編の山岳小説（いずれも「白き嶺の男」集英社刊に収録）に決定した。副賞百万円。贈呈式は5月31日、東京、丸の内の東京会館で行われる。

谷甲州氏は、1981年にH A Jが派遣したカンチェンジュンガ学術遠征隊の学術隊員として活躍した谷本秀喜氏。ヤルン・カンの標高測量などで活躍した。最近も徳間書店から「ジャンキー・ジャンクション」という山岳小説を刊行したばかりである。益々の活躍を期待したい。

遠藤会長の退職を労い、酒井理事の出版を祝う会開かれる

1984年5月にH A J副会長に就任し、90年からは会長職に就かれている遠藤会長が、3月末をもって勤務先の千代田学園を定年退職した。

また、H A Jのサマー・キャンプで雪宝頂、四姑娘山、慕士塔格、玉珠峰、ヌン峰などの隊長を歴任している酒井国光理事が「ヤマケイ登山学校」シリーズの「春山」を担当して刊行した。

4月23日東京・池袋の「東方会館」にて、遠藤会長の退職を労い、酒井理事の出版を祝う夕べが開かれた。当日は、遠藤会長の古い山の先輩や友人、サマー・キャンプ参加者など約100人が出席してなごやかに春の一夜を過ごした。

第三回 事故と環境対研開く

第三回となったH A J主催の高所登山、事故と環境対策研修会が、4月7日東京にて開催された。雪崩、高所障害、転滑落などの事故例とテイクイン、テイクアウトを研修した。参加者40名。

東京集会のお知らせ

日時 5月27日(月)午後7時～
H A Jの今後について懇談します。
場所 H A Jルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)

東京新聞の本

登山のオールラウンド情報誌



毎月15日発売(日・祝日を除く) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

■第1特集

- 1月号★アイゼン、輪かん、スキータイプ別雪山山行
- 2月号 自然案内人と山を歩こう 山をもっと味わうために
- 3月号★全員集合/山スキーフリーク
- 4月号 自然の源・針葉樹と広葉樹、照葉樹の森を歩く
- 5月号★GWに楽しむ山 雪覆・新緑そして花の山
- 6月号 北海道の山と人 日高、大雪、知床をめぐる
- 7月号★読者がつくる夏山プラン ファミリー賛歌
- 8月号 湿原の山旅 地図で探したとっておきの池浦
- 9月号 私の好きな山小屋 近郊の山から北アルプスまで
- 10月号★HOW TO 紅葉の山を味わう 撮る、描く、遊ぶ
- 11月号 ローカル線の山旅 徹底ガイド付き
- 12月号 実践/雪山へのいざない (入門編)

(★は特大号となります)

■特別企画

- 1月号 「僕でも登れる？」 —冬ハケ岳を楽しむ
- 2月号 「僕でも登れる？」 —アイスクライミングに挑戦
- 3月号 「僕でも登れる？」 —尾瀬で山岳スキーに開眼
- 4月号 「僕でも登れる？」 —これぞ岳人/春雪の西穂高岳へ(12回完結)
- 5月号 「アルプス・ツエルマット研究」
- 6月号 「モンブラン一周トレッキング」
- 7月号 「花のアルプス・ハイキング」
- 8月号 「ドロマテの岩塔に遊ぶ」
- 9月号 「南米ロライマ山にロストワールドを訪ねる」
- 10月号 「ニュージーランド——手付かずの自然を楽しむ」
- 11月号 「海外トレックの王道・エベレスト街道に行く」
- 12月号 「冬の北米、アウトドアライフ最新事情」

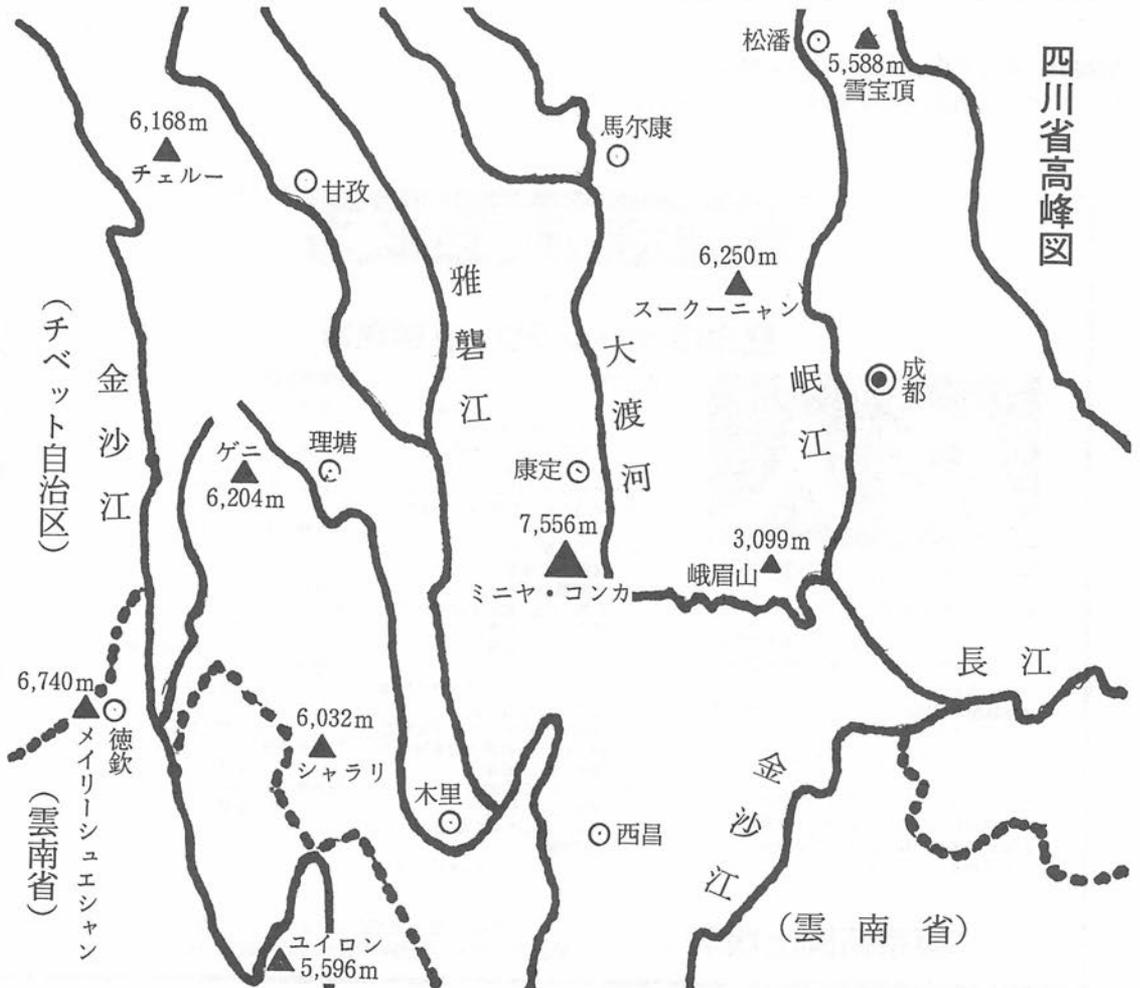
東京新聞出版局(中日新聞) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674
書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

5-1 ミニヤ・コンカ (貢嘎山 Minya Konka)

- * 山脈：横断山脈。
- * 位置：成都 (505 m) の南西約240km。康定 (2,615m) の南南西約50Km。
[29° 37' N, 101° 53' E]
- * アプローチ：成都がスタート地点である。成都までは北京から飛行機で2時間の旅。東京を午前の早い便で飛び立てばその日の内に成都に着くことができる。成都からミニヤ・コンカの東を流れる長江の一大支流で大渡河の東にある二郎山 (3,437m) を越えるルートならば一日で、康定や磨石 (1,600 m) に入ることができるが、現在このルートはトンネル工事中のため使用できない。

このため雅安 (627m) から南下して石棉に出てここから北上して康定や磨石に到るルートを使用すると二日間行程となる。

東面の登山基地が磨石、西面の登山基地が康定である。東面はイ族、西面はチベット族の世界である。東面のハイローコー氷河のBCは第一营地まで車、そこから先はポーターで一日で約3,400mのBCに到着する。同じく東面のヤンズーコー氷河のBCは、ダオサイチュンまで車、そこからポーター一日で約3,950mのBCとなる。西面BCへは康定から途中まで車を使えるが、後は馬のキャラバンで4,643m、4,423mの



峠を越えて4日の旅である。

* ルートの所要日数：1984年秋に西面から北西稜に登ったドイツ隊は3名で3,800mのBCからキャンプ4つを移動して2週間で登頂した。

* 山の概念：主峰7,556m。周辺に孫逸仙（6,886m）など多くの6,000m峰がある。

* 通常の登山時期：春と秋のシーズン。

* 山名：チベット語で「ミニャグ地方白い氷の山」の意。

* 小史：1878年ハンガリーのツェチュニイ遠征隊が7,600mと算定。1903年にはオーストリアのJ. H. エドガールが9,000mとした。29年アメリカのジョセフ・ロックが雲南から木里を通して北上し、西面を探索した。30年アーノルド・ハイムが東面と西面の氷河を調査。32年にアメリカ隊が西面から初登頂。57年に中国隊が同ルートから第二登頂した。

* 参考文献：岳人400号 [東京新聞出版局 昭和55年刊] 人民中国353号 [1982年11月号] ヒマラヤの東 (中村保) 「山と溪谷社」 [1996年4月刊]

登山の概要

■主峰 (7,556m)

1932年

9月～10月 北西稜 アメリカ隊

初めての登山隊として入山。初めに南面に入り6,100mまで偵察したがここを断念した。次に10月2日にコンカ・ゴンパから出発して北西稜上に到達。26日6,550mにC4設営。28日にモーアとバードソルは午前5時出発、午後2時40分に初登頂に成功した。

「隊長：ターリス・モーア、ジャック・ヤング、R. L. バードソル、A. B. シモンズ」

1957年

5月～6月 北西稜 中国隊

5月14日に西面にBC設営。28日に5,000mから雪崩が発生し、丁行友が死亡するというアクシデントがあったが、6月10日6,250mにC5を設営。11日6,600m、12日6,700m

と進み、13日午前3時に出発し、午後1時半に史占春、劉連満、劉大義、師秀、彭仲穆、国徳存の6名が第二登に成功した。下降午後4時過ぎから風雪となり、師秀、彭仲穆、国徳存の3名は滑落行方不明となった。

「隊長：史占春、許競、劉連満、劉大義、師秀、彭仲穆、国徳存、張祥、崔之久、丁行友、張 嵩、王振ら29名」

1980年

9月～10月 南面 アメリカ隊

9月中旬にコンカ・ゴンパに入り、大コンパ氷河の4,600mにABCを出し、第二アイスフォール帯の下、5,125mにC1を設営。これを突破できずに南西稜に転進したが、10月15日6,250mに達したのを最後に断念した。

「隊長：アンドルー・ハーヴァード、ルイス・ライカート、ジェッド・ウィリアムスン、ヘンリー・パーバー、ゲリー・ポカード、ランス・オウエンス」

9月～10月 北面 アメリカ隊

初登ルートの北西稜を目指して10月6日北面4,400mにBC設営。バットレスの途中5,500mにC1を設営。13日6,000mまで荷上したシュイナード、リッジウェイ、シュミッツ、ライトの4名がC1上50mで足元から出た雪崩のため流され500m落ちた。ライトは死亡、他の2名も重傷を負った。

「隊長：アル・リード(43) キム・シュミッツ(35) ジョン・ロスケリー(31) イヴォン・シュイナード(43) リック・リッジ・ウェイ(31) J. ライト」

10月 東面偵察 北海道山岳連盟隊

偵察のため入山。東面ハイローコー氷河の5,000m付近、ヤンズコー氷河の4,600m付近まで偵察した。

「隊長：京極紘一(37) 岸憲宏(37) 梅沢俊(35) 三和裕信(34) 野村信昭(34) 阿部幹雄(27)」

「貢嘎の東」1981年3月刊

1981年

4月～5月 北東稜 北海道山岳連盟隊

北東稜からの登頂を目指して25名で入山。

4月4日ヤンズコー氷河右岸3,850mにBC設営。5月7日に6,950mにC5設営。23名が二次に分かれて登頂を目指した。10日奈良副隊長ら12名が第一次アタックのためC5を出発したが、15時35分に藤原が北壁に転落。このためアタックを中止して一本のロープを使用して島田、浦、中嶋、松永、佐々木、小田嶋、小野寺の7名が下降中に誰かが滑落し7名全員が北壁側に落ち死亡した。このため登山を中止したが、残るメンバー16名でも一人も収容できなかった。

「隊長：川越昭夫(43) 金子春雄(68) 中道孝則(38) 奈良憲司(36) 渡辺鉄男(36) 沼崎勝洋(37) 梅沢俊(35) 浅利欣吉(49) 森美枝子(39) 神原正紀(36) 中嶋正博(35) 藤原裕二(34) 浦光夫(32) 佐々木茂(31) 小田嶋均(34) 小野寺忠一(29) 島田昌明(28) 森永浩(28) 仙北屋正明(31) 小川進(31) 高場健司(29) 木村孝(29) 工藤典美(27) 阿部幹雄(27) 小川直人(23)」

「貢嘎山 1981 ミニヤ・コンガ7,556m登攀と遭難の記録」1982年12月刊

1982年

3月～5月 北東稜 市川山岳会隊

ハイローコー氷河側から北東稜經由での登頂を目指して7名で入山。3月19日3,500mにBC設営。隊長は予定通り下山し6名で登山開始。4月21日北東稜のコル(5,800m)にC3設営。26日6,200mにC4設営。松田と菅原が27日に6,600m、28日6,800mと泊まり29日に頂上直下まで到達したが、翌日登頂を諦めて下降するもルートを見失い、トランシーバーも故障してC1との連絡もとれなくなった。武田らは5月4日C2上まで到達したが、6日BCへ下山し、9日BCを撤収した。松田と菅原はこの間少しずつ下降を続けC1まで降りたが、ここで菅原と別れた松田は19日BC下の中国側BCで倒れている所を地元民に発見され救出された。菅原の遺体は9月に収容された。

「隊長：斉藤英明(37) 武田良雄(31) 松田宏也(26) 菅原信(26) 鈴木茂(30) 広井順子

(28) 栗原和恵(23)」

「ミニヤコンカ奇跡の生還」(松田宏也)

「山と溪谷社」1983年1月刊

4月～5月 北西稜 スイス隊

5月25日アントレアス・エッシュマンらが北西稜から登頂に成功したが、下降中視界不良となりエッシュマンが行方不明となった。

4月～5月 北西稜 カナダ隊

ロジャー・グリフィスの率いる隊が北西稜にトライしたが、悪天候のため稜線に達しただけで断念した。

9月～10月 北西稜 アメリカ隊

9月16日3,850mにBCを設営。悪天候のためC2での停滞や荷物を吹き飛ばされるなどの事故があったが、10月1日6,340mにC3を設営。翌日6,700mのクレバスに泊まり、3日にコフィールドとケリーが16時半登頂した。

「隊長：ロジャー・グリフィス、ダナ・コフィールド(24)、ダグラス・ケリー(36)、バーバラ・ケリー、ミッチェル・レナー、ネド・アンドリュース、シャーロン・アンドリュース」

9月～10月 市川山岳会隊

春に遭難した菅原隊員の遺体が地元民によって発見されたため収容のため入山。9月24日4,100m付近で遺体を収容したが、不調を訴えBC(3,500m)まで降りていた中谷隊員が、27日2,900mで高山病のため死亡した。

「隊長：斉藤英明(37) 武田良雄(32) 川崎泰照(30) 中谷武(27)」

1984年

9月～10月 北西稜 ドイツ隊

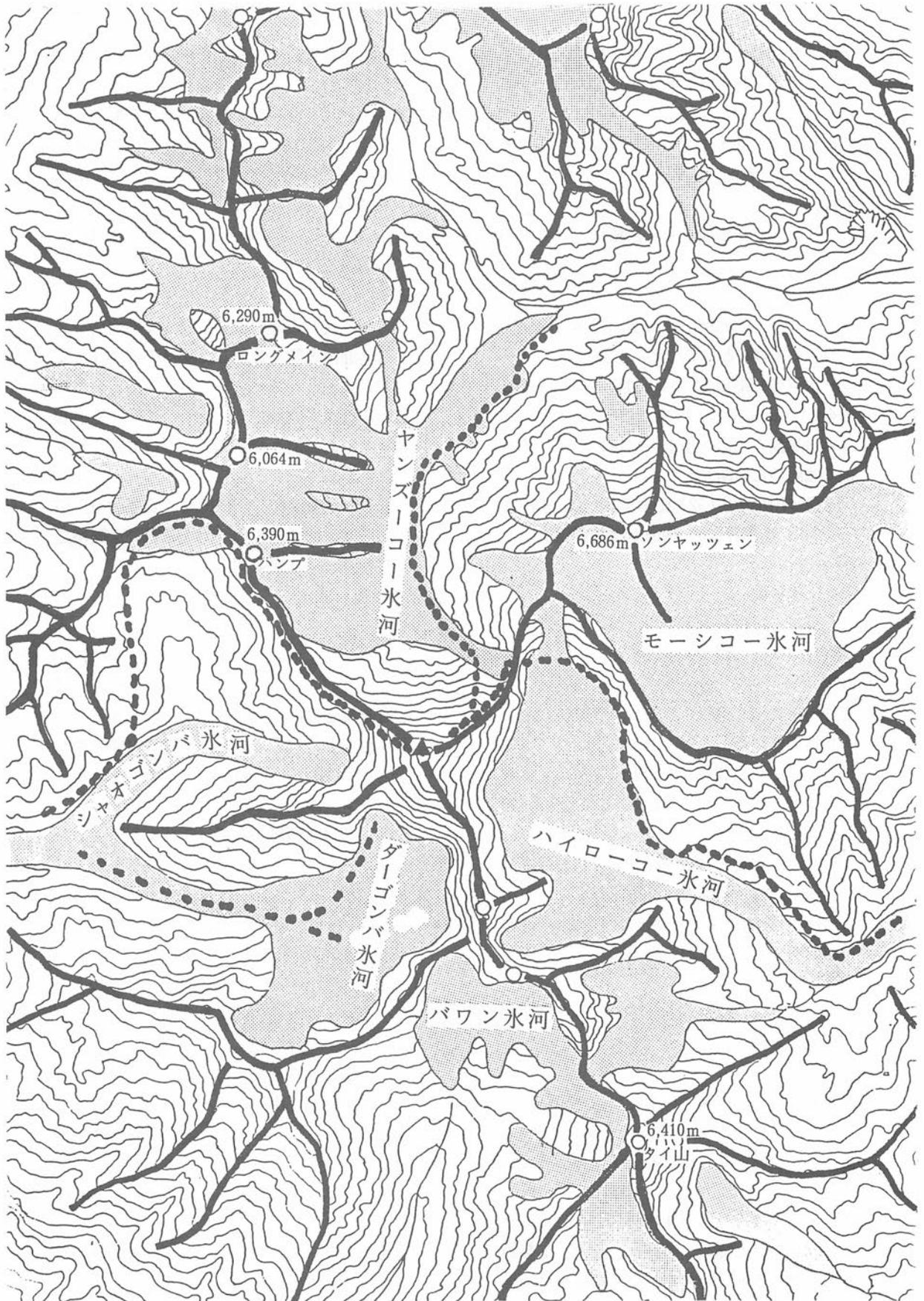
9月22日に3,800mにBC設営。10月3日にハンプを越えて6,200mにC3設営。5日6,700mに泊まり6日全員登頂した。第五登目。

「隊長：ゲルハルト・シュマッツ(55) ハンス・エンゲル(40) ヘイツ・ゼムシャ(41)」

1985年

9月～10月 北西稜 香港隊

9月15日BC設営。23日5,200mにC3設営したが10月2日まで降雪のため停滞。4日



午前5時45分に大雪崩がC3を襲う。BCまで降りると食糧ポーターが死亡したことを告げられ登山を中止した。

「隊長：チュン・キン・マン(32) ガ・シュ・ワル(25) チャン・ウィック・カイ(26)」

1989年

フランス隊が西面から北西稜に入るも登頂は断念した。

1990年

3月～5月 北西稜 北海道山岳連盟隊

81年の再登隊として入山。3月31日ヤンズコー氷河の4,000mにBC設営。4月19日C3を5,740mに出し、稜線上の6,460mから5月1日隊長と山本が頂上を目指したが、6,540mで強風のため断念した。

「隊長：川越昭夫(52) 山本健司(40) 松田幸一(40) 富山昇(25) 報道＝工藤哲靖」

〔貢嘎山〕

8月 北東稜 イタリア隊

北東稜を目指して入山したが、階段状氷河に取りつく前に登頂を断念した。

1991年

9月～10月 北東稜 日本ヒマラヤ協会隊

9月15日に東面ハイローコー氷河の3,400mにBC設営。22日に4,200mにC1、10月13日北東稜のコル(5,800m)にC3設営。20日6,400mに到達したものの登頂を断念した。

「隊長：山森欣一(47) 松館正義(47) 伊藤清春(40) 森谷雅春(37) 松田靖彦(32) 中川裕(31) 居川康祐(29) 河内正樹(29) 林雅樹(28) 千葉真嗣(25) 高見清十(25) 川上豪(22)」

〔天壇の山に挑むーミニヤ・コンカ東面〕

1992年5月刊

1994年

8月～10月 北東稜 日本ヒマラヤ協会隊

8月25日に東面ヤンズコー氷河の3,950mにBC設営。9月19日階段状上のスノープラトー5,850mにC3設営。20日北東支稜6,050mまで到達。BCで休養後、C4設営のためC3に入った福沢、渡辺靖、鈴木、工藤の4名が28日午前11時の定時交信を最後に消息

を絶った。このため登山を中止し、9月30日と10月1日の好天時に階段状氷河の途中まで捜索を行うも何も得られずに捜索を断念した。

「隊長：山森欣一(50) 渡辺斉(54) 福沢卓也(28) 高田幸子(44) 渡辺靖之(27) 鈴木洋介(27) 工藤潤二(22)」

〔ミニヤ・コンカ峰ー登山と遭難の記録〕

1996年4月刊

1995年

3月～4月 貢嘎山遭難者遺体捜索団

81年北海道隊で遭難した隊員の遺体収容を目的に東面ヤンズコー氷河に入山。3月22日から捜索を開始。4,100m～4,450mを中心に捜索したが何も発見することはできなかった。

「隊長：氏家英紀 阿部幹雄 安藤俊市 沼崎勝洋 仙北屋正明 菊池弘範 太田裕之 長谷洋一 奈良憲司」

■周辺の山

1981年

4月～7月 スイス隊

ハイローコー氷河に入り、2,950mにBCを置き周辺の山々を登りつくした。5千メートル台の5座に登頂したが、これは除いて6千メートル峰の内訳は下記のとおりである。

*タイシャン(戴山・Tai 6,410m)

5月20日北西稜からブーテリエ、ドゥレンベルガー、ハフリンガー、スポエリーの4名が初登頂。

*ソンヤツェン(孫逸仙・Sunyixian 中山峰・Zhongshan 6,686m) ミニヤ・コンカの北東約6.5kmにある重厚な山。

ハイローコーの北側にあるモーシコーとヤンズコーの分水嶺にある山であるが、彼らはこの山を攻めるために、ハイローコー氷河の左岸の岩場(市川隊のイグアナ)を越えて北側のモーシコーに入り、6月4日主峰の東稜からブーテリエ、ドゥレンベルガー、ハフリンガー、スポエリーの4名が初登頂に成功した。

続いて5日にはソンヤツェン主峰の南西約2kmにある6,652m峰に南稜からブーテリ

エとドゥレンベルガーが初登頂した。

またハイローコー氷河とモーシコー氷河を分ける山稜上に聳える3つの峰にも初登頂した。内訳は西から6,028m峰(白いピラミッド)とその南東にある6,143m峰(ピラミッド)の2峰に7月2日ブーテリエ、ドゥレンベルガー、ハフリンガー、ミューラー、スポエリー、ステジャーの6名が成功。4日にはさらにその東にある6,141m峰(長い稜の山)にベニソウィッチ、フージャー、ミューラーの3名が成功したのである。

■ジャズ(嘉子・Jiazi ルチェ・コンカ Rudshe Konga 6,540m) ミニヤ・コンカの北約20kmにある。岩膚の目立つドッシリした山である。

1981年

4月～5月 イギリス隊

4月6日3,900mにBC設営。北西のリウチ氷河とツィブロンギ氷河の源頭に立ち、16日5,928m峰に登頂。その後北東稜と北西稜を試みたが登頂できなかった。

「隊長：ヘンリー・デイ(38) フィリップ・

ニーム、マレー・キャンベル、ヴァーノン・ニーダム、アルバート・ウィットリー、フランク・フィリップ、ロフティ・アーシー、アンディ・バクスター、アンディ・レガット」

1982年

10月～11月 アメリカ隊

南稜から11月17日カリス、マーケル、ノルティンゲの3名が初登頂に成功した。また西稜からも試みられたが頂上直下で敗退した。

「隊長：フレッド・ベッキー、パトリック・カリス(44) ジョン・マーケル(30) リチャード・ノルティンゲ(39) ディーヴ・スターツマン、ジム・ウィリアム、ダグ・マッカート、ロブ・ハート」

■その他の山

トゥパル(Tuparu ロー・ウェット 5,464m)に1991年5月アメリカのダブニー・イーサムらがむかったが、北西壁から頂上直下3ピッチ下で断念した。

中国山岳・砂漠地図

| | 縮尺 | 発行 | 定価 |
|--------------------|--------|-----|-------|
| チョモランマ(英文) | 1:10万 | 91年 | 1500円 |
| シシヤパンマ(英文) | 1:10万 | 94年 | 2000円 |
| クングール～ムスターグアタ | | 同上 | 2000円 |
| チョゴリ(k2) | | 同上 | 2000円 |
| ミニヤコンカ(中文) | 1:2.5万 | 85年 | 3000円 |
| ボグダ(中文) | 1:5万 | 83年 | 2000円 |
| バツラ氷河図(中パ共同調査・中英文) | 1:6万 | 78年 | 2500円 |
| 中国氷雪凍土図(中英文) | 1:400万 | 88年 | 3000円 |
| 中国現代氷河と雪線高度分布図(英文) | 1:600万 | 86年 | 2000円 |
| 敦煌莫高窟景観図(中文) | 1:2千 | 93年 | 3000円 |
| ホータン河流域図(中文) | 1:50万 | 93年 | 3000円 |
| ケリヤ河流域図(中文) | 1:40万 | 88年 | 3000円 |
| 青海チベット高原自然景観図(中文) | 1:300万 | 90年 | 2500円 |

(以上送料何枚でも240円)

申込先 中国地図研究会

郵便振替口座 00160-0-576537

電話 0424-92-3965(夜及び日曜 渡辺方)

〒204 清瀬市中清戸5-72、24-304 渡辺方

西藏登山の和文参考資料一覧

(1979年開放以後のもの)

- 1) チョモランマ (Qomolangma) 8,848m & チャンツェ (Zhangzi) 7,553m
1. チョモランマに立つ (日本山岳会隊・エベレスト中国ルート激闘全記録) 読売新聞社 昭和55年6月25日 1,000円
2. チョモランマ・チベット (日本山岳会珠穆朗瑪登山隊公式報告) 講談社 昭和56年11月10日 5,400円
3. 珠穆朗瑪登山1980 (北壁及び北東稜の登攀) 「山岳75年」日本山岳会 1980年12月1日 3,500円
4. みんなが頂上にいた (岡島成行) 山と溪谷社 1983年2月1日 1,900円
5. 雪煙をめざして (加藤保男) 中央公論社 昭和57年11月15日 1,200円
6. 果てしなき山行 (尾崎隆) 中央公論社 昭和58年7月20日 1,200円
7. チョモランマ峰・美しい女神 (王富州) 「月刊 人民中国」1982年6月号 200円
8. 珠穆朗瑪峰 (1979年チョモランマ偵察隊) 横山宏太郎 「岳人393号」1980年3月号
9. 珠穆朗瑪峰登頂成功 (江本嘉信) 「山と溪谷513号」1980年8月号
10. レポート「チョモランマ」編集部「岩と雪77号」昭和55年10月
11. 絶頂への道・チョモランマ単独無酸素登頂 (ラインホルト・メスナー) 「山と溪谷520号」1981年1月号
12. エベレストに秘められた (ラルフ・パーカー) 「山と溪谷522号&523号」1981年3&4月号
13. チベット北壁隊・苦闘の90日 (カモシカ同人) 「山と溪谷571号」1984年4月号
14. チョモランマ北壁への戦い 上・下 (長谷川昌美) 「山と溪谷597 & 600号」1985年11月号 & 1986年1月号
15. 冬季・チョモランマ北壁 (Topics) 「山と溪谷598号」1985年12月号
16. チョモランマ単独行 (ラインホルト・メスナー) 山と溪谷社 1985年4月10日 2,200円
17. エベレスト物語「岩と雪97号」昭和58年8月号
18. カモシカ同人隊、チョモランマ北壁撤退 「山と溪谷602号」1986年3月号
19. 魔頂チョモランマ (今井通子) 朝日新聞社 1986年8月 1,300円
20. 東北東稜に挑んだダグ・スコット隊 (湊周介) 「岳人487号」1988年1月号
21. チベット友誼の華長存—1986年チャンツェ峰合同登山研修隊報告書— (第6次日中合同登山技術研修会) 1986年8月24日
22. チョモランマ北峰・章子峰登頂 (日本中国合同登山研修隊) 「岳人471号」1986年9月号
23. 端午の節句にエベレスト山頂で握手 「岳人488号」1988年2月号
24. 冬のチョモランマの咆哮 (長谷川恒男) 「山と溪谷634号」1988年5月号
25. チョモランマ交差縦走に成功 「岳人492号」1988年6月号
26. ドキュメント・チョモランマ、5月5日 (神長幹雄) 「山と溪谷637号」1988年8月号
27. 大量12人が山頂に立つ (岡島成行) 「岳人493号」1988年7月号
28. 中国・日本・ネパール三国合同チョモランマ交差縦走1 & 2 (中国登山協会) 「岳人496号 & 497号」1988年10月 & 11月号
29. 中・日・ネ三国友好登山隊 (大塚博美) 「山岳第83年」日本山岳会 1988年12月20日
30. チョモランマ峰西稜 (1987年秋) 川上隆 「山岳第83年」日本山岳会 3,500円
31. 踏跡第7号 (防衛大学校山岳会珠穆朗瑪峰登山報告) 防衛大学校山岳会 昭和63年9月
32. 第三の女神 (松本圭一) 1989年6月

33. チョモランマ見果てぬ夢 (長谷川恒男) 「山と溪谷644号」1989年3月号
34. 珠穆朗瑪峰登山計画「ヒマラヤ213号」1989年8月号
35. チョモランマ北壁 (H A J 珠穆朗瑪峰登山隊) 「ヒマラヤ218号」1990年1月号
36. チョモランマ峰カンシュンリッジ (平野真一) 「山岳第86年」日本山岳会 1991年12月7日 3,500円
37. ふたりのチョモランマ (貫田宗男) 「山岳第86年」日本山岳会 同前
38. チョモランマ・サガルマタ1988 (中国・日本・ネパール1988年チョモランマ・サガルマタ友好登山隊) 読売新聞社 1989, 5 5,150円
39. チョモランマ/サガルマタ友好登山隊報告書 (日本山岳会) 1990/5
40. たったふたりのチョモランマ (貫田宗男) 「山と溪谷674号」1991年9月号
41. 禁じられた岩壁 エヴェレスト東壁新ルートの記録1988年「ヒマラヤ219号」1990年2月号
42. 二人のチョモランマ (貫田宗男) 山と溪谷社 1992年2月 1,500円
43. 日本・カザフスタン友好チョモランマ登山報告 (同登山隊) 1993年2月20日
44. エヴェレスト北東稜 (もうひとつの報告) 「岩と雪158号」1993年6月号
45. チョモランマ北東稜 (大宮求) 「山岳第88年」日本山岳会 1993年12月4日
46. エヴェレスト初登頂40周年「岩と雪158号」1993年6月号
47. もう一つのエヴェレスト、チョモランマトラバース「ヒマラヤ262号」
48. エヴェレストが二メートル低くなった話 (木崎甲子郎) 「山601号」1995年6月号
49. 未踏の北東稜からエヴェレスト登頂!! (神崎忠男) 「山602号」1995年7月号
50. 日本大学エヴェレスト登山隊、未踏の北東稜から初登頂「山と溪谷720号」1995年7月号
51. エヴェレスト北東稜を初完登「岳人577号」1995年7月号
52. 日本大学山岳部隊未踏の北東稜からエベレストに登頂「山と溪谷721号」1995年8月号
53. タクティクスの勝利 (古野淳) 同上
54. より強く、より高く (アリソン・J・ハーグリーブス) 「山と溪谷722号」1995年9月号
55. 日本大学エベレスト登山隊 ピナクルを越えてー 仮報告書 (同隊)
- 2) マカルー (Makalu) 8,463m & チョモ・レンゾ (Chomo Lonzo) 7,790m
1. 微笑んだ女神「チョモ・レンゾ」立教大学「山と溪谷703号」1994年2月号
2. 手作りの立大隊、新ルートからチョモ・レンゾ登頂 (高橋克昌) 「山と溪谷703号」1994年2月号
3. 烈風のチョモ・ロンゾ (武石浩明) 「岩と雪164号」
4. チョモロンゾ峰 中国側からの初登頂 立教大学チョモロンゾ登山隊・学術調査隊の記録 (鯨坂青青) 「山岳第89年」1994年12月3日刊
5. 天空にのびる長大な岩稜を目指して (山本宗彦) 「岳人572号」1995年2月号
6. マカルー峰東稜より登頂成功!! (重廣恒夫) 「山601号」1995年6月号
7. マカルー東稜・登頂記 (山本篤) 「山602号」1995年7月号
8. マカルー東稜に挑んだ日本山岳会隊、チベット側新ルートから登頂成功 同上 95, 8
9. マカルー東稜初登に成功「岳人577号」1995年7月号
10. マカルー東稜初登の軌跡 (山本宗彦) 「岳人578号」1995年8月号
11. マカルー登頂の報を聞いてー若い隊員の飛躍を確信してー (山田二郎) 「山603号」1995年8月
12. ヒマラヤに挑むー私の登山観ー (藤平正夫) 「山605号」1995年10月号
- 3) チョー・オユー (Cho Oyu) 8,201m、チョー・ウィ (Qowoyat) 7,354m、ラプチェ・カン (Labuche Kang) 7,367m、スークェンリ
1. 卓奥友峰登頂 (張俊岩・成天亮) 「ヒマラヤ177号」1986年8月号
2. チョー・オユーの登頂と滑空 (カモシカ同人) 「岳人486号」1987年12月号

- 3.私は登り、あなたは飛んだ(カモシカ同人)
「岳人486号」1987年12月号
- 4.チョー・オユーから飛ぶ(高橋和之)「クラ
イミング・ジャーナル 33号」1988年1月号
- 5.乔烏衣登山計画「ヒマラヤ179号」1986年10
月号
- 6.乔烏衣登山計画「ヒマラヤ182号」1987年1
月号
- 7.端正な未踏峰チョー・ウィ登頂(日本ヒマラ
ヤ協会隊)「岳人476号」1987年2月号
- 8.乔烏衣登山報告書(日本ヒマラヤ協会チョー・
アウイ登山隊1986年実行委員会)1986年11月
15日
- 9.干峰偵察報告「ヒマラヤ181号」1986年12月
号
- 10.日中友好ラプチュェ・カン峰合同登山計画「ヒ
マラヤ190号」1987年9月号
- 11.ラプチュェ・カン初登頂「ヒマラヤ194号」1988
年1月号
- 12.15人のサミッター(山森欣一)「山と溪谷630
号」1988年1月号
- 13.ラプチュェ・カン初登頂「岳人488号」1988年
2月号
- 14.友好の白き頂ラプチュェ・カン(日本ヒマラヤ
協会)1988年4月
- 15.乔烏衣峰7,354m(日本ヒマラヤ協会、チョー・
アウイ登山実行委員会)1987年7月
- 16.チョー・オユー1985(三谷統一郎)「山岳第
81年」日本山岳会 1986年12月20日
- 17.チョー・オユーのパラグライダー・フライト
(高橋和之)「山と溪谷629号」1987年12月号
- 18.ヒマラヤを翔ぶ チョー・オユー8,201m
(高橋和之/今井通子)未来社 1,800円 1988
- 19.8,000m峰14座完登を目指す山田隊(日本ヒ
マラヤ協会チベット登山隊)「岳人500号」
- 20.2つの8,000m峰連続登頂計画「ヒマラヤ204
号」1988年11月号
- 21.8千米峰連続登頂-シシャパンマ、チョー・
オユー-「ヒマラヤ208号」1989年3月号
- 22.チョー・オユーとシシャパンマ(ヴォイチエ
フ・クルティカ)「岩と雪145号」1991年4月
- 23.チョー・オユー峰登頂(芳賀孝郎)「山岳第
86年」日本山岳会 1991年12月 3,500円
- 24.8,000mの女神の峰へ(永田秀樹)「岳人517
号」1990年7月号
- 25.四光峰の風-チベットの白き頂きに立つ-
(大阪市立大学日中友好学術登山隊)1990年
7月
- 26.幾つになっても登りたい シルバータートル
のチョー・オユー(渡辺玉枝/遠藤京子)
「岳人535号」1992年1月号
- 27.50歳以上のチョー・オユーの登頂(池田錦重)
「山岳第87年」日本山岳会
- 28.50歳の8,000m峰チョー・オユー無酸素挑戦
記(近藤和美)「登山時報217号~218号」1993
年3月~4月号
- 29.チョー・オユー峰登頂1991(石川富康)「東
海山岳No.6」1994年2月
- 30.秘峰[メンロンツェ]初登頂(アンドレイ・
シュトレムフェリ)「岩と雪157号」1993年4
月号
- 31.チョー・オユー峰~2つのビッククライミン
グ(遠藤由加/山野井泰史)「岳人570号」19
94,12
- 32.ふたりのチョー・オユー南西壁(長尾妙子+遠
藤由加)「山と溪谷713号」1994年12月号
- 33.チョー・オユー南西壁に単独で新ルート開拓
8,000メートル孤独の闘い(山野井泰史)「山
と溪谷714号」1995年1月号
- 34.チョー・オユー アルパイン・スタイル(山
野井泰史+長尾妙子+遠藤由加)「岩と雪168
号」1995年2月号
- 35.チョー・オユー登山(深瀬一男)「山597号」
1995年2月号
- 36.運動生理学の成果と陥穽(日本チョー・オユー
学術登山隊・山本正嘉)「山と溪谷721号」
- 37.8千米メートル峰、登山タクティクス解明への
試み(山本正嘉)「岳人578号」1995年8月号
- 38.秋田から8千米峰へ チョー・オユー峰(秋田
チョー・オユー登山隊1995)1995年11月
- 39.ラプチュェ・カンII(7,072m)初登頂-1995
年スイス隊の記録-「ヒマラヤ294号」1996
年5月号
- 4)シシャパンマ(Xixabangma)8,012m&ポー

- ロン・リ (Porong Ri) 7,292m & カン・ベン・チン (Can Ben Chen) 7,281m
1. シシャパンマ1981年・春 (日本女子登山隊の記録) 女子登攀クラブ 1981年9月 2,200円
 2. 女たちの山 (シシャパンマに挑んだ9人の決算) 落合誓子 山と溪谷社 昭和57年12月10日 980円
 3. シシャパンマ峰・氷美の世界 (張俊岩) 「月刊 人民中国」1983年1月号
 4. 女だけのシシャパンマ (北村節子) 「山と溪谷521号」1981年2月号
 5. 手記・私ひとりのシシャパンマ (田部井淳子) 「山と溪谷531号」1981年8月号
 6. 麗峰シシャパンマに立つ (北村節子) 「山と溪谷531号」1981年8月号
 7. 改造人間シシャパンマと戦う (悪天に阻まれた速攻登山) 原 真 「岳人427号」1983年1月号
 8. ドキュメント「速攻登山」(加藤幹敏・原真) 「東京新聞出版局」1984年3月 2,200円
 9. 現代ヒマラヤ登攀史 (編集部) 「岩と雪111号」昭和60年8月号
 10. Der Bergmorgen 3号 (故 和田実君追悼号Porong Ri報告) 大分 R.C.C 昭和58年5月17日
 11. ポーロン・リ登頂 (梅木秀徳) 「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月 3,000円
 12. チベット高原学術登山隊1982概要報告書 京都大学学士山岳会
 13. カンペンチン (森本陸世) 「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月 3,000円
 14. チベット旅情 (カンペンチン初登頂) 斉藤清明 芙蓉書房 昭和58年7月15日 1,500円
 15. チベットをゆく京都大学学士山岳会 (カンペンチン登頂と学術調査82, 3~5) レポーター 永田秀樹 「岳人421号」1982年7月号
 16. イェジ・ククチカ残されたシシャパンに西稜から登頂 (坂下直枝) 「山と溪谷629号」1987
 17. XIXABANGMA 1980年プレ・モスーン西ドイツ隊の記録「岩と雪83号」1981年8月
 18. 遥かなるチベット 希夏邦馬峰登頂 (愛知学院大学山岳会) 1990年2月
 19. チョー・オユーとシシャパンマ (ヴォイチエフ・クルティカ「岩と雪145号」同前
 20. 60歳の8千メートル峰登頂記 (中島道郎) 「山544号」1990.11.20
 21. 毎日新聞、8千メートル峰「無酸素」登頂の報道記事に思う (中島道郎) 「山545号」1990.11.20
 22. 還暦男二人、八千米峰に登るの記 (中島道郎) 「山岳第85年」日本山岳会 1990年12月 3,500円
 23. 京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊 (シシャパンマ隊) 報告 (松沢哲郎) 「山岳第86年」日本山岳会 1991年12月 3,500円
 24. 遠き嶺シシャパンマ (長野県山岳協会創立30周年記念登山隊) 1992年9月
 25. 福岡支部創立35周年シシャパンマ隊報告 (日野悦郎) 「山岳87年」日本山岳会 1992年12月5日
 26. 希夏邦馬峰 立正大学山岳部 1993年3月
 27. 50歳の8,000m峰シシャパンマ無酸素挑戦記 (近藤和美) 「登山時報219号」1993年5月号
 28. シシャパンマ登頂1989 (湯浅道男) 「東海山岳No.6」1994年2月1日
 29. 女たちの地球山旅 秘境シシャパンマへの凱旋 (北村節子) 「岳人556号」1993年10月号
 30. 雪豹同人シシャパンマ登山報告 (日本勤労者山岳連盟)
 31. シシャパンマ登頂レポート1~5 (労山・雪豹同人希夏邦馬峰登山隊「登山時報239号~243号」1995年1月号~5月号
 32. 再起の山 シシャパンマ (小西政雄×松田宏也) 「山と溪谷725号」1995年12月号
 33. 安堵、そして充実のとき (松田宏也) 「岳人582号」1995年12月号
 34. シシャパンマ 1995年秋シシャパンマ峰登山報告書 (Y.M.S タートル倶楽部) 1996年2月刊
 - 5) ナムチャ・バルワ (Namcha Barwa) 7,782m & ギャラ・ペリ (Gyala Peri) 7,294m
 1. ナムチャバルワ (水野勉) 「ヒマラヤ128号」1982年7月号
 2. ナムチャバルワ峰登頂を目指して (李舒平)

- 「岳人451号」1985年1月号
- 3.ナムチャバルワ（伊東享）「山と溪谷597号」1985年11月号
 - 4.7,000mの未踏峰をめざして（ギャラ・ペリ偵察）「岳人463号」1986年1月号
 - 5.最高峰ナムチャバルワとヤル・ツァンポー大屈曲点周辺の山々（山森欣一）「岳人464号」1986年2月号
 - 6.秘峰ギャラ・ペリ偵察1985「ヒマラヤ170号」1986年1月号
 - 7.東チベットの大湾区部と幻の高峰（山森欣一）「山と溪谷601号」1986年2月号
 - 8.ギャラ・ペリとナムチャバルワ（伊東享）「岳人464号」1986年2月号
 - 9.謎の大河にそびえる幻の高峰「ギャラ・ペリ」（日本ヒマラヤ協会隊）「山と溪谷618号」1987年2月号
 - 10.加拉白里登山計画「ヒマラヤ179号」1986年10月号
 - 11.謎の河の白い頂（HAJギャラ・ペリ登山隊）「ヒマラヤ183号」1987年2月号
 - 12.チベットの秘峰・南迦巴瓦峰（王振華）「ヒマラヤ184号」1987年3月号
 - 13.ヤルツァンポー河大湾区部調査（楊逸疇、丘睦美訳）「ヒマラヤ94号」1979年9月号
 - 14.謎の河の秘峰ギャラ・ペリ 日本ヒマラヤ協会 昭和62年9月1日
 - 15.ナムチャ・バルワへの道1～3「ヒマラヤ224号～226号」1990年7月～9月号
 - 16.神秘のグレート・ベンド・ナムチャ・バルワ 日本ヒマラヤ協会 1991年1月1日
 - 17.ナムチャバルワ峰偵察隊第1～2報（重廣恒夫）「山547&548号」1991.1～2
 - 18.NAMCHA BARWA 鷹が両翼を広げたようにそそり立つ未踏の秘峰「岳人525号」
 - 19.「ナムチャバルワ」いかにして登るか（和田城志）「岩と雪147号」1991年8月
 - 20.幻の山 ナムチャバルワを飛ぶ（迫田泰敏）「山と溪谷675号」但し写真は裏焼き！
 - 21.ナムチャバルワ峰偵察報告（重廣恒夫）「山岳第86年」日本山岳会 1991年12月 3,500円
 - 22.ナムチャバルワ通信（重廣恒夫）「山557～560号」1991.10～92.1
 - 23.大鷹を思わずチベットの秘峰、ナムチャバルワへの挑戦（日中合同登山隊）「岳人537号」1992年3月号
 - 24.1991年ナムチャバルワ峰合同登山（重廣恒夫）「山岳第87年」日本山岳会
 - 25.ナムチャバルワの気象（奥山巖）「山岳第87年」1992年12月5日
 - 26.チベットの秘峰ナムチャバルワ初登頂（日中ナムチャバルワ合同登山隊）「岳人548号」1993年2月号
 - 27.日本・中国ナムチャバルワ合同登山「山岳第88年」日本山岳会 1993年12月
 - 28.ナムチャバルワ第六信～八信（重廣恒夫）「山569～571号」1992年10月号～12月号
 - 29.ナムチャバルワ初登頂 読売新聞社 1994年10月30日刊 非売品
- 6) ナムナニ (Namunani) 7,694 m & カン・リン・ポチュ (Kang Rimpoche) 6,656 m
- 1.未踏の山・辺境の山第5回「カイラス」（加藤洋）「岳人409号」1981年7月号
 - 2.納木那尼峰（日中友好納木那尼合同登山隊）「岳人447号」1984年9月号
 - 3.西チベットの未踏峰ナムナニに照準「岳人447号」1984年9月号
 - 4.聖地巡礼カイラスの旅「ヒマラヤ155号」1984年10月号
 - 5.チャンタン高原から聖地巡礼の旅（山森欣一）「ヒマラヤ156号」1984年11月号
 - 6.西藏・聖地カイラス巡礼（NHK取材班）日本放送出版協会 昭和60年6月1日 1,700円
 - 7.チャンタン高原と聖地巡礼（山森欣一）「岳人450号」1984年12月号
 - 8.神の山 カイラス（五百沢智也）「山と溪谷583号」1985年1月号
 - 9.風雪は人を磨く（李舒平）「岳人464号」1986年2月号
 - 10.日中合同納木那尼峰先遣隊1984報告書 日中友好納木那尼峰合同登山隊
 - 11.ナムナニ（日中友好納木那尼峰合同登山隊）毎日新聞社 1986年6月 6,900円
 - 12.聖山巡礼（玉村和彦）山と溪谷社 1987年5

- 月 1,800円
13. 聖地巡礼とナムナニ峰偵察・1984年「年報・HIMALAYA 3月号」日本ヒマラヤ協会 1986年9月15日
 14. 聖なる山「カイラス」へ（貫田宗男）「山と溪谷624号」1987年7月号
 15. チベットの霊山 カイラス（足立隆）「岳人504号」1989年6月号
 16. 聖山「カン・リンポチュ」日本巡礼団の旅（桶川和気夫）「ヒマラヤ275号」
 17. グゲ王国とカイラス山、西ネパールの旅（永田秀樹）「岳人575号」1995年5月号
 - 7) クーラ・カンリ（Kula kangri）7,554m、カルジャン（Karjiang）7,216m
 1. 天帝の峰クーラ・カンリを目指して（長谷川浩）「岳人464号」1986年2月号
 2. 微笑んだ「天帝の峰」クーラ・カンリ「山と溪谷610号」1986年8月号
 3. クーラ・カンリ初登頂—そして東チベットから成都へ初横断—（神戸大学西藏学術登山隊）「岳人472号」1986年10月号
 4. クーラ・カンリ初登頂（平井一正）「山岳第82年」日本山岳会 1987年12月20日 3,500円
 5. 神領の峰へ（HAJカルジャン登山隊）「ヒマラヤ179号」1986年10月号
 6. 烈風の頂へ—カ熱疆峰初登頂の記録—「ヒマラヤ182号」1987年1月号
 7. 天帝の峰に挑む（神戸大学西藏学術登山隊）神戸新聞総合出版センター 1988年8月 3,500円
 - 8) チョモラーリ（Qomo Lhari）7,364m
 1. 綽莫拉利峰—チョモラーリ—（張俊岩／福山信）「ヒマラヤ184号」1987年3月号
 2. 曠野に座する仙女の峰「チョモラーリ」（東野良）「山と溪谷725号」1995年12月号
 - 9) ニンチンカンサ（Ningchin Kangsha）7,191m
 1. 第2次チベット・ヒマラヤ登山隊報告書 ニンチンカンサ登山隊・東チベット踏査隊 1985大分県山岳連盟（松元徹編）大分県山岳連盟 1986年12月 1,800円
 2. 宇金抗沙峰（ニンチンカンサ）西面初登頂 仮報告書（栃木県高校体育連盟登山部）1995.9
 3. 寧金抗沙峰合同登山隊1995年報告書（福岡大学体育会山岳部／福岡大学山岳会）
 - 10) ニエンチェンタングラ（Nyainqentanglha）7,162m
 1. 東北大学日中友好西藏学術登山隊報告書（東北大学日中友好西藏学術登山隊実行委員会）1986年9月
 2. チベット高原の盟主—ニエンチェンタングラ—東北大学山の会 1994年6月刊
 3. 未登峰ニエンチェンタングラIV峰に登頂成功（藤田清）「登山時報250号」
 4. ぼくたちのヒマラヤ登山 ハイキングから未踏の7,000m峰ニエンチェンタングラへ（松葉桂二）「岳人582号」1995年12月
 5. 桑頂抗沙峰登山隊報告（同隊）1994年3月15日
 6. チャチャチョ 偵察6,447メートル（長野県山岳協会西藏東部登山隊）「山と溪谷709号」1994年8月号
 7. タンラ・ポ（6,394メートル）登頂（中央大学学生会体育連盟山岳部）「岳人576号」1995.6
 8. 現役大学生主体で登ったチベットの未踏峰タンラ・ポ（黒川恵）「山と溪谷720号」1995年7月号
 - 11) ルンボ・カンリ（Loinbo Kangri）7,095m
 1. チベットの未踏峰、ルンボ・カンリ登山計画「ヒマラヤ270号」
 2. ルンボの神を仰ぎて（八嶋寛）「ヒマラヤ274号」
 3. ルンボ・カンリ試登7,095メートル（日本ヒマラヤ協会ルンボ・カンリ登山隊）「山と溪谷709号」1994年8月号
 4. ルンボ・カンリ—チベットの未踏峰・7,095m。1994年試登の記録—（日本ヒマラヤ協会）95,4
 - 12) カント（Kangto）7,060m
 1. カント峰に賭けた同志社大学の山男「岳人493号」1988年7月号
 2. 遙か久恋の峰（同志社大学カント峰登山隊）

- 毎日新聞社 1989年7月20日 6,180円
- (その他)
- 1.中国の山へのアプローチ (阿部淳)「ヒマラヤ104号」1980年6月号
 - 2.中国登山レギュレーション全文対訳「岩と雪75号」1980年6月
 - 3.開かれた中国の高峰「岳人400号」1980年10月号
 - 4.中国の高峰 中国登山協会監修 東京新聞出版局 昭和56年1月29日 2,000円
 - 5.チベットの旅 (中国人民美術出版社編) 美乃美 1981年5月20日 1,500円
 - 6.中国にくる外国の登山団体・登山旅行団の費用徴収についての規則「岳人409号」1981年7月号
 - 7.チベットの七年 (ハインリヒ・ハラール、福田宏年訳) 白水社 1981年9月25日 3,500円
 - 8.中国登山ハンドブック (未知、秘境、未踏の山総ガイド) 上越山岳協会 ベースボールマガジン社 1981年12月20日 1,800円
 - 9.進む中国奥地の山岳研究 (渡辺義一郎)「岳人415号」1982年1月号
 - 10.チベット南東部の氷河 (鄭本興)「岩と雪80号」1982年4月号
 - 11.チベット研究文献目録「日本文・中国文篇」1887年～1977年 (貞兼稜子編) 亜細亜大学アジア研究所 昭和57年4月10日 6,500円
 - 12.世界のアルピニストがねらう中国の山々 (王鳳桐)「月刊 人民中国」1982年5月号
 - 13.チベットの都・ラサ案内 (金子英一) 平河出版社 1982年6月20日 2,700円
 - 14.チベット紀行 (NHK取材班) 日本放送出版協会 1982年 1,500円
 - 15.チベット潜行十年 中公文書 (木村肥佐生) 中央公論社 1982年 400円
 - 16.写真集 チベット (ユーゴスラヴィア・レビュー社/中国上海美術出版社) ベースボール・マガジン社 1982年 9,800円
 - 17.チベット (篠山紀信) 朝日新聞社 1982年 6,000円
 - 18.入蔵日誌 (矢島保治郎) チベット文化研究所 1983年1月22日 1,800円
 - 19.東チベット紀行 (ドウオグ村の人とその暮らし) 江本嘉伸「山と溪谷560号」1983年7月号
 - 20.これからの中国登山「ヒマラヤ142号」1983年9月号
 - 21.中国登山研究「ヒマラヤ142号」1983年9月号
 - 22.中国登山協会一行来日「岩と雪98号」 83年10月
 - 23.チベットおよびその付近の山々 (フランク・ブースマン/水野勉・訳)「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月1日 3,500円
 - 24.ヒマラヤ文献目録 (葉師義美編) 白水社 1984年1月25日 19,000円
 - 25.ルンタの秘境 (江本嘉伸) 光文社 1984年4月30日 980円
 - 26.チベット滞在記 (多田等観・牧野文子編) 白水社 1984年 1,800円
 - 27.氷山雪嶺二千年 (周正) 譚佐強/田川常雄・訳 ベースボールマガジン社 1985年3月10日 2,200円
 - 28.中国西域紀行 (風見武秀)「岳人460号」1985年10月号
 - 29.初のヒマラヤ横断1,000km (山里寿男)「岳人461号」1985年11月号
 - 30.ラサへのあこがれ (D.レイフィールド、水野勉訳) 日本山書の会 1985年11月 4,500円
 - 31.天上の道—憧憬のラサへ (トーマス・レイヤード)「山と溪谷597号」1985年11月号
 - 32.チベットおよびその付近の山々補遺 (水野勉)「山岳第80年」日本山岳会 1985年12月20日3,500円
 - 33.チベットわが祖国—グライ・ラマ自叙伝— (木村肥佐生訳) 亜細亜大学アジア研究所 1986年1月15日 1,800円
 - 34.ヒマラヤ文献消遥 (水野勉) 鹿鳴荘 1986年3月 18,000円
 - 35.中国登山研究会 (日本ヒマラヤ協会)「ヒマラヤ174号」 1986年5月号
 - 36.中国登山の和文参考資料一覧 (日本ヒマラヤ協会)「ヒマラヤ175号」1986年6月号
 - 37.世界無銭旅行者・矢島保治郎 (浅田晃彦)

- 筑摩書房 1986年6月 1,600円
- 38.東チベット紀行 (E・タイクマン、水野勉訳) 白水社 1986年7月5日 2,200円
- 39.躍進するチベット登山協会 (山森欣一)「ヒマラヤ176号」1986年7月号
- 40.女性大使チベットを行く (劉曼卿著/岡崎俊夫・松枝茂夫共訳) 白水社 1986年8月30日 2,200円
- 41.憧憬の中国、西遊の7,000km「山と溪谷611号」1986年9月号
- 42.チベット入門 (ペマ・ギャルポ) 日中出版 1987年1月25日1,800円
- 43.中国とたたかったチベット人 (J・ノルブ編著、ペマ・ギャルポ/三浦順子共訳) 日中出版 1987年1月25日 1,800円
- 44.中国登山研究会「ヒマラヤ184号」1987年3月号 500円
- 45.中国の費用撤収規定 (1987年1月発効)「ヒマラヤ186号」1987年5月号
- 46.チベット自転車行 (九里徳泰)「ヒマラヤ190号」1987年9月号
- 47.中国大陸・下巻 天壤無限 (白川義員) 小学館 28,000円
- 48.チベットのお正月 (藤田弘基)「岳人487号」1988年1月号
- 49.チベット走破5,000キロ (九里徳泰)「山と溪谷631号」1988年2月号
- 50.東ヒマラヤ探検の歴史 (上) 東チベットとビルマ北部の山々 (金子民雄)「岳人488号」1988年2月号
- 51.東ヒマラヤ探検の歴史 (中) ベイリー、ウォードらの探検 (金子民雄)「岳人489号」1988年3月号
- 52.厳寒の友好道路走破 (小林憲生)「山と溪谷632号」1988年3月号
- 53.エベレスト、マカルーを飛ぶ (岡島成行)「山と溪谷633号」1988年4月号
- 54.チベットのファッション (藤田弘基)「岳人490号」1988年4月号
- 55.東チベット横断紀行 (朝日教之) 山と溪谷社 1988年10月 1,600円
56. T I B E T 失われた魂・チベット (遠藤正雄) 時事通信社 1989年5月 2,370円
- 57.ーラサに戒厳令敷かれるー (江本嘉伸)「山と溪谷646号」1989年5月号
- 58.チベット高原自転車ひとり旅 (九里徳泰) 山と溪谷社 1989年11月 1,600円
- 59.中国登山の手引き・初版 (山森欣一) 日本ヒマラヤ協会 1990年3月31日 3,000円
- 60.長寿と叡智をもたらす聖なる山の偉大な河「ヤル・ツァンポー」(ギャロル・ダナム)「山と溪谷666号」1991年1月号
- 61.西藏漂泊 チベットに魅せられた10人の日本人 (江本嘉伸)「山と溪谷666号〜」1991年2月
- 62.世界の屋根を逍遙 夢のチベット・トレッキング (クリスティナ・フォン・ディットフルト)「山と溪谷678号」1992年2月
- 63.中国登山の手引き・第二版 (山森欣一) 日本ヒマラヤ協会 1992年4月22日 3,000円
- 64.チョモランマ・カンジュン谷周辺の地形 (明治大学チョモランマ峰遠征隊・学術班) 93年11月
- 65.西藏漂泊 (江本嘉伸) 山と溪谷社 (上) 2,800円 (下) 3,000円
- 66.エヴェレスト 1921年、1922年 (ジョージ・リー・マロリー/田中純夫訳) 日本山岳会上越支部 1994年8月刊
- 67.中国登山の手引き・第三版 (山森欣一) 日本ヒマラヤ協会 1994年3月18日 3,500円
- 68.チベット紀行 (帝塚山学院チベット踏面隊)「岳人571号」1995年1月号
- 69.世界の山々 (アジア・アフリカ・オセアニア編) 古今書院 1995年9月2日 2,800円
- 70.ヒマラヤの東 (雲南・四川、東南チベット、ミャンマー北部の山と谷 (中村保) 山と溪谷社 1996年3月15日 3,000円
- 71.青いケシの国からチベットへ (盛田武士)「岳人586号」1996年4月号
- 72.中国登山の手引き・第四版 (山森欣一) 日本ヒマラヤ協会 1996年5月15日 3,500円

■ 寸 感 ■

ミニヤ・コンカ北東支稜に単独で挑む計画があるという。登頂を前提として考えるならば、相当の高所登山経験者でなければ計画できないであろうと思う。荷物を背負って5～10日のアルパイン・スタイルで登るつもりなのであろうか。

登山はどんな考え方で実行されてもよいし、どんなスタイルでもよい。こうでなければダメだ、という考え方は恐い。しかし、事故を起こさないための方策を計画のなかに入れる必要はあるだろう。この点からも事故対策研修会の参加者が少ないことが気がかりである。(山森)

事務局日誌(4月)

- 3日(水) 総会用ハガキ受取人払い手続き
- 7日(日) 第三回高所登山事故と環境対策研修会(於かんぼプラザ、山森、中川)
- 10日(水) ヒマラヤ294号発送
- 14日(日) ミニヤ・コンカ隊、鈴木洋介隊員のお別れ式(筑波、山森、渡辺、高田)

- 17日(水) プラブーツ懇談会(山森、中川)
大内理事から「北海道女性マスターグ・アタ97年」について連絡あり。
- 21日(日) プラブーツ突然破壊シンポジウム(東京、山森、寺沢、中川)
- 22日(月) 東京集会(16名)
- 23日(火) 遠藤会長の退職を労い、酒井理事の出版を祝う会(東方会館92名)
- 25日(木) 第三種監査報告書豊島郵便局へ提出

ヒマラヤ No.295 (6月号)

平成8年5月10日印刷 8年6月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION&TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のバイオニア



株式
会社

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707
運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メイルオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004